提　言　書

～いわて文化支援ネットワークの活動から～

『震災から9年　次の10年に向けて今やるべきこと』

目次

Ⅰ はじめに …… 2

Ⅱ 活動報告
市民参加の舞台振興と持続可能なコミュニティ形成活動
・市民参加劇勉強会の実施 …… 4
・みやこ市民劇の専門的スキルアップ支援 …… 4
地域・世代の交流と次世代を育む活動
・復興支援コンサートキャラバンの実施 …… 5
被災地・被災者からの思いを伝え語り継ぐ活動
・「いわて震災小説2020」の発行 …… 6
・朗読劇ワークショップの実施 …… 7
文化による支援を啓発する活動
・「いわて文化復興支援フォーラム」開催 …… 8

Ⅲ 沿岸被災地における文化芸術活動のニーズ調査　アンケート集計結果報告 …… 10

Ⅳ 現地の声
・みやこ市民劇 ～復興から新しき文化の道へ～ …… 22
・コンサートキャラバンに参加して …… 25
・市民参加劇勉強会・朗読劇ワークショップ　参加体験記 …… 27
・「いわて震災小説２０２０」の発行に携わって …… 29
・伝える …… 31

Ⅴ まとめ「次の10年へ、災後に強い文化芸術を育てる」 …… 34

Ⅰ はじめに

はじめに

新型コロナウィルスの影響で、集団感染のリスク軽減のため文化芸術活動は活動の中止や延期、もしくは縮小という「自粛」を余儀なくされています。

今年の２月８、９日は第２回の「みやこ市民劇」が開催され、２ステージに合計1,600人の観客が集まりました。今回の公演を実質的に仕切ったのは、前回の公演「拓け、いのちの道を」をきっかけに集まった「みやこ市民劇ファクトリー」の方々でした。メンバーは約30名。文化芸術活動を核とした「仲間たち」が誕生し、その仲間たちが一つのミッションをなしとげたのです。

本事業で地道な支援活動を展開してきた成果であると胸を張って言えると思います。しかし、この公演時期が、もう一か月後だったら、公演そのものが可能であったかどうかと思うと、手放しで喜ぶことはできません。

震災後、ほぼ半年、岩手県内の文化芸術活動は、ほぼ機能していませんでした。沿岸被災地だけではなく、県内全域で閉塞状況が続きました。今回の新型コロナウィルス問題もいつ収束するか不明の状況で、文化芸術活動が通常時に戻る道筋を見つけることは難しい状況です。これも一つの「災い」です。

震災や戦災に負けないコミュニティを作るための「文化芸術」の在り方を模索してきた私たちは、今、新たな「災い」に直面しています。震災からやっと復興しつつある被災地の文化芸術活動が、再び、沈降してしまう恐れがあります。なにせホールや公民館などの「活動の場」や「人と人が集まる機会」が激減しているのです。

来年度は、いよいよ10年目の３月11日を迎える節目の年です。本来ならば、これまでの活動の成果を発揮し、次の10年に向けて、新たな提案を行うべき年ですが、そのことも可能かどうか危うくなってまいりました。

この提言書には、様々な事業の報告と地域からの思いの発信、そしてアンケート結果がまとめられております。そして、その文章の中にいくつかの課題も提起されています。これらの一つひとつに向き合っていかなくてはならないと考えています。また、不透明な新型コロナウィルス対策に文化芸術がどう立ち向かうべきかという点も課題の一つです。

持続可能な地域づくりのための文化芸術、災後に機能する文化芸術の役割について、多くの人々と論議を尽くしてまいりたいと存じます。

令和２年３月11日

特定非営利活動法人
いわてアートサポートセンター　理事長
坂田　裕一

Ⅱ 活動報告

活　動　報　告

市民参加の舞台振興と持続可能なコミュニティ形成活動

（1）市民参加劇勉強会の実施

令和元年12月６日（金）　陸前高田市コミュニティホール　参加者数：９名
令和元年12月15日（日）　魚河岸テラス（釜石）　参加者数：10名

陸前高田市での市民劇実現と、釜石市での市民劇継続のために、「市民参加劇勉強会」を各市で実施した。昨年当法人が発行した「市民参加劇読本」を基に、市民参加劇への理解を深めながら勉強会は進められた。講師を務めた坂田裕一理事長の経験に基づいたアドバイスを伺いながら、参加者は積極的に意見を出し合い、今後の展望につながる活気に満ちた勉強会となった。

また、この勉強会参加者から２名をみやこ市民劇実地研修（２月８日・９日）へ派遣した。バックステージの見学や本番の観劇など、市民参加劇の創作過程を知る充実した体験となった。

市民参加劇勉強会（釜石）

市民参加劇勉強会（陸前高田）

（2）みやこ市民劇の専門的スキルアップ支援

衣装メイク指導　：大清水　文子・目黒　千恵子
殺陣指導　：長掛　憲司
ダンス指導　：土岐　美野
和の所作・踊り指導：若柳　力代
舞台美術指導　：長内　努
舞台スタッフ指導　：古舘　聖人
演出助手指導　：遠藤　麻由

第２回みやこ市民劇「鍬ケ崎エレジー～激闘！宮古港海戦～」
令和２年２月８日（土）・９日（日）　宮古市民文化会館　大ホール　入場者数：1600名

第２回目を迎える「みやこ市民劇」の専門的な技術のスキルアップを図るため、公演の稽古に「衣装メイク」、「殺陣」、「ダンス」、「和の所作・踊り」、「舞台美術」、「舞台スタッフ」等の指導者を派遣した。

また、みやこ市民劇と同規模で実施される二戸市民文士劇へスタッフ２名を派遣し、準備から公演終了までの３日間、舞台監督研修および小道具等スタッフ研修を実施した（11月８～10日）。

専門家の指導を受けた参加者たちは、指導から得たものをみやこ市民劇第２回公演で発揮し、優れた演劇作品を上演することができた。

殺陣指導の様子（宮古）

第２回みやこ市民劇の様子

地域・世代の交流と次世代を育む活動

復興支援コンサートキャラバンの実施

令和２年１月14日　会場：あかまえこども園（宮古）　来場者：69名
令和２年１月14日　会場：善林寺（宮古）　来場者：24名
令和２年１月15日　会場：山田第一保育所（山田）　来場者：84名
令和２年１月15日　会場：龍泉寺（山田）　来場者：15名
令和２年１月16日　会場：健やかホール（宮古）　来場者：42名

演奏家：竹原　奈津（フリー）、齋藤　彩（フリー）、宮坂　拡志（NHK交響楽団）
齊藤　弦、村野井　友菜、木戸口　夏海（以上いわてフィルハーモニー・オーケストラ）

東京の第一線で活躍する音楽家と岩手で活動する音楽家が沿岸各地（宮古・山田）で無料の演奏会を開催した。

お客様からは、「沿岸地域だとプロの演奏を間近で聞く機会がほとんどないので貴重な経験だった」、「心温まりました」などの声が聞かれた。

各会場の近隣の皆様にも多数ご来場いただき、プロの演奏家と地域住民の交流が実現したコンサートキャラバンとなった。

コンサートキャラバンの様子

被災地・被災者からの思いを伝え語り継ぐ活動

（1）「いわて震災小説2020」の発行

募　　集：令和元年８月～10月
発　　行：令和２年２月　Ａ５版500部
選考委員：池田　克典（元岩手県文化振興事業団理事長）
柏葉　幸子（児童文学作家）
斎藤　純（作家）
外岡　秀俊（作家・元朝日新聞社東京本社編集局長）

震災から８年を経て、被災体験や被災地を思いやる気持ちを今こそ伝えてもらおうと、岩手在住者や出身者など岩手ゆかりの方々から、震災をテーマにした「掌編小説」を募集した。県内外から集まった51編から、すぐれた作品を選考して作品集500部を発行した。10代から80代までの幅広い世代から寄せられた作品は、明日をみすえた力強い希望に満ち溢れ、感動的なものが多かった。作品集は県内外の図書館などに広く贈られた。

作品集「いわて震災小説2020」

（2）朗読劇ワークショップの実施

令和元年12月７日（土）　陸前高田グローバルキャンパス　参加者数：10名
令和元年12月14日（土）　釜石市民ホールTETTO　参加者数：21名
講師：江幡　平三郎・坂田　裕一

モデル上演作品「ねじれた記憶」
作　　：高橋　克彦
構成・演出：坂田　裕一
共同演出：江幡　平三郎
出　　演：江幡　平三郎
　　目黒　千恵子
　　木下　義則（パーカッション演奏）

県内でさかんに行われている朗読劇に親しんでもらうために、陸前高田市と釜石市で「朗読劇ワークショップ」を開催した。

色とりどりの照明や生演奏、なかでもプロの朗読の聞きやすさ、なめらかさ、美しさに参加者は感心しながら観劇し、朗読劇の面白さに魅了された様子だった。講師による朗読の仕方やコツについてのお話のあと、実際に参加者にも朗読劇を体験していただいた。

朗読劇にはじめて取り組んだ方も多かったが、今回のワークショップを機に今後も取り組みたいという声がたくさん聞かれ、沿岸での朗読劇団体の誕生に大きく近づいた充実のワークショップであった。

朗読劇ワークショップの様子（陸前高田）

文化による支援を啓発する活動

「いわて文化復興支援フォーラム」開催

日時：令和２年３月８日（日）午後１時30分～
会場：もりおか町家物語館　浜藤ホール

第一部　いわて震災小説２０２０　入賞作品授賞式
朗読劇　～公募震災小説より～
出演：工藤　有季
東海林　千秋
冨田　淳治
目黒　千恵子
山井　真帆
ピアノ演奏：鈴木　牧子

「いわて震災小説２０２０」最優秀賞・優秀賞・入選受賞者にご出席いただき、賞状・作品集を贈呈。また、被災した方々や、被災地に寄り添う方々からお寄せいただいた51編の掌編小説から優秀作品５編を選び、ピアノの演奏に乗せて、県内の演劇人による朗読劇として上演。

第二部　選者と受賞者による懇談会
ゲスト（選者）：池田　克典（元岩手県文化振興事業団理事長）
柏葉　幸子（児童文学作家）
斎藤　純（作家）
コーディネーター：坂田　裕一（特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長）

「震災と文学」をテーマに、「いわて震災小説２０２０」の選者と受賞者による懇談会を実施。

朗読劇～公募震災小説より～

選者と受賞者による懇談会

Ⅲ 沿岸被災地における文化芸術活動のニーズ調査　アンケート集計結果報告

沿岸被災地における文化芸術活動のニーズ調査　アンケート集計結果報告

今年度、いわてアートサポートセンターでは、沿岸地域に住む一般市民を対象に、文化芸術に対するニーズについてアンケート調査を実施した。

アンケートは、被災地の人々が文化芸術に求めるものを把握するためのものであり、次の10年に向けて何が必要なのかを検討したい。

アンケートにご回答いただいた621名の属性は以下の表の通りである。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	計
大船渡市	4	6	12	15	13	20	2	72
釜石市	4	5	6	23	18	68	3	127
久慈市	10	1	2	2	2	1	0	18
宮古市	11	8	22	39	26	135	10	251
陸前高田市	0	2	3	4	4	8	0	21
岩泉町	0	1	2	9	5	3	0	20
大槌町	1	1	4	2	0	6	0	14
住田町	0	5	5	5	4	2	1	22
洋野町	0	1	0	0	0	0	0	1
山田町	1	0	0	0	1	7	0	9
田野畑村	0	0	0	1	1	2	0	4
不明	3	1	1	0	3	23	14	45
その他	4	1	0	4	3	5	0	17
計	38	32	57	104	80	280	30	621

1　沿岸地域における文化芸術の鑑賞について

(1)　直近３年間のうち、文化芸術作品を直接鑑賞したことのある人の割合(%)

※下段は回答された実数です。

ジャンル＼世代	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	総回答者数に占める鑑賞した人の割合(%)
演劇・ミュージカル	63.2	34.4	29.8	29.8	35	26.1	10	30.1%
	24	11	17	31	28	73	3	187
オペラ・合唱	50	37.5	29.9	26	33.8	32.1	16.7	31.7%
	19	12	17	27	27	90	5	197
映画	34.2	46.9	38.6	41.3	0.4	25.7	13.3	32.4%
	13	15	22	43	32	72	4	201
オーケストラ・室内楽	42.1	21.9	29.8	25	38.8	35	16.7	32.2%
	16	7	17	26	31	98	5	200
吹奏楽	31.2	40.6	31.6	31.7	0.4	33.6	10	34.9%
	24	13	18	33	32	94	3	217
ジャズ	13.2	15.6	10.5	5.8	13.8	8.6	3.3	9.3%
	5	5	6	6	11	24	1	58
ポップス	2.6	21.9	17.5	7.7	18.8	7.1	0	9.8%
	1	7	10	8	15	20	0	61
ロック	7.9	15.6	12.3	5.8	7.5	1.1	3.3	5.0%
	3	5	7	6	6	3	1	31
民謡	13.2	9.4	17.5	5.8	10	14.6	3.3	11.9%
	5	3	10	6	8	41	1	74
美術	28.9	34.4	31.6	25	35	26.1	6.7	27.2%
	11	11	18	26	28	73	2	169
工芸	23.7	18.8	22.8	16.3	17.5	13.6	3.3	15.8%
	9	6	13	17	14	38	1	98
写真	23.7	28.1	28.1	14.4	26.3	23.9	10	22.5%
	9	9	16	15	21	67	3	140
舞踊・ダンス	23.7	21.9	19.3	12.5	17.5	22.5	10	19.3%
	9	7	11	13	14	63	3	120
郷土(民俗)芸能	31.6	43.8	35.1	34.6	43.8	29.3	10	32.5%
	12	14	20	36	35	82	3	202
大衆芸能(漫才・落語)	28.9	15.6	24.6	16.3	21.3	17.5	6.7	18.5%
	11	5	14	17	17	49	2	115
総回答者数(人)	38	32	57	104	80	280	30	621

(2) これから見たい文化芸術作品のジャンルの割合(%)

※下段は回答された実数です。

ジャンル＼世代	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	総回答者数に占める鑑賞した人の割合(%)
演劇・ミュージカル	47.4	37.5	35.1	35.6	38.8	34.3	23.3	35.6%
	18	12	20	37	31	96	7	221
オペラ・合唱	26.3	37.5	28.1	24.0	32.5	19.3	13.3	23.7%
	10	12	16	25	26	54	4	147
映画	42.1	37.5	29.8	35.6	25.0	22.5	20.0	27.5%
	16	12	17	37	20	63	6	171
オーケストラ・室内楽	28.9	28.1	22.8	31.7	30.0	22.1	20.0	25.4%
	11	9	13	33	24	62	6	158
吹奏楽	31.6	25.0	22.8	23.1	22.5	15.4	16.7	19.8%
	12	8	13	24	18	43	5	123
ジャズ	44.7	37.5	33.3	27.9	33.8	16.4	13.3	24.8%
	17	12	19	29	27	46	4	154
ポップス	31.6	28.1	28.1	29.8	22.5	13.2	10.0	20.3%
	12	9	16	31	18	37	3	126
ロック	34.2	28.1	22.8	26.9	16.3	7.9	10.0	16.3%
	13	9	13	28	13	22	3	101
民謡	10.5	28.1	10.5	9.6	8.8	11.1	16.7	11.6%
	4	9	6	10	7	31	5	72
美術	34.2	28.1	21.1	18.3	22.5	12.5	10.0	17.6%
	13	9	12	19	18	35	3	109
工芸	15.8	28.1	14.0	11.5	18.8	10.4	10.0	13.2%
	6	9	8	12	15	29	3	82
写真	28.9	21.9	17.5	12.5	20.0	8.2	6.7	13.2%
	11	7	10	13	16	23	2	82
舞踊・ダンス	23.7	25.0	19.3	19.2	11.3	14.3	3.3	15.8%
	9	8	11	20	9	40	1	98
郷土(民俗)芸能	10.5	12.5	17.5	20.2	11.3	11.8	10.0	13.5%
	4	4	10	21	9	33	3	84
大衆芸能(漫才・落語)	15.8	31.3	21.1	23.1	25.0	20.7	20.0	21.9%
	6	10	12	24	20	58	6	136
総回答者数(人)	38	32	57	104	80	280	30	621

(3) 改善点

※複数回答可

	演劇・ミュージカル							オペラ・合唱						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	16.7%	40.2%	2.3%	25.8%	2.3%	12.9%	100.0%	21.2%	38.5%	2.9%	22.1%	2.9%	12.5%	100.0%
回答数	22	53	3	34	3	17	132	22	40	3	23	3	13	104

	映画							オーケストラ・室内楽						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	3.8%	45.2%	8.7%	26.9%	3.8%	11.5%	100.0%	15.6%	44.4%	4.4%	23.3%	1.1%	11.1%	100.0%
回答数	4	47	9	28	4	12	104	14	40	4	21	1	10	90

	吹奏楽							ジャズ						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	3.3%	47.5%	4.9%	23.0%	3.3%	18.0%	100.0%	5.3%	44.0%	2.7%	16.0%	5.3%	26.7%	100.0%
回答数	2	29	3	14	2	11	61	4	33	2	12	4	20	75

	ポップス							ロック						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	9.6%	48.2%	4.8%	15.7%	2.4%	19.3%	100.0%	8.3%	38.9%	2.8%	16.7%	1.4%	31.9%	100.0%
回答数	8	40	4	13	2	16	83	6	28	2	12	1	23	72

	民謡							美術						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	3.0%	25.4%	3.0%	14.9%	4.5%	49.3%	100.0%	0.0%	32.8%	10.4%	26.9%	7.5%	22.4%	100.0%
回答数	2	17	2	10	3	33	67	0	22	7	18	5	15	67

	工芸							写真						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	0.0%	30.6%	11.3%	22.6%	3.2%	32.3%	100.0%	0.0%	32.8%	13.8%	19.0%	5.2%	29.3%	100.0%
回答数	0	19	7	14	2	20	62	0	19	8	11	3	17	58

	舞踊・ダンス							郷土(民俗)芸能						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	4.5%	27.3%	7.6%	19.7%	3.0%	37.9%	100.0%	1.7%	25.9%	6.9%	24.1%	5.2%	36.2%	100.0%
回答数	3	18	5	13	2	25	66	1	15	4	14	3	21	58

	大衆芸能(漫才・落語)						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	2.5%	46.9%	6.2%	17.3%	1.2%	25.9%	100.0%
回答数	2	38	5	14	1	21	81

選択肢一覧
A.入場料が高い
B.開催回数が少ない
C.開催期間が短い
D.会場までの交通の便が悪い
E.作品のクオリティが低い
F.鑑賞したいと思うものがない

2 文化芸術の創作活動について

(1) 現在、文化芸術活動に取り組んでいる人の割合(%)

※下段は回答された実数です。

ジャンル＼世代	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	総回答者数に占める文化芸術活動に取り組んでいる人の割合(%)
演劇・ミュージカル	28.9	9.4	15.8	7.7	7.5	2.5	3.3	7.2%
	11	3	9	8	6	7	1	45
オペラ・合唱	26.3	3.1	5.3	1.9	6.3	9.6	0.0	7.7%
	10	1	3	2	5	27	0	48
吹奏楽	28.9	3.1	8.8	1.0	0.0	1.4	0.0	3.5%
	11	1	5	1	0	4	0	22
映画	7.9	3.1	3.5	1.0	1.3	0.7	0.0	0.6%
	0	0	0	1	1	2	0	4
オーケストラ・室内楽	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.1	0.0	1.8%
	3	1	2	1	1	3	0	11
ジャズ	0.0	0.0	1.8	3.8	1.3	0.7	0.0	0.5%
	0	0	0	1	0	2	0	3
ポップス	5.3	0.0	1.8	3.8	0.0	0.7	0.0	1.3%
	0	0	1	4	1	2	0	8
ロック	5.3	0.0	1.8	3.8	0.0	0.4	0.0	1.3%
	2	0	1	4	0	1	0	8
民謡	0.0	0.0	3.5	0.0	1.3	1.8	0.0	1.3%
	0	0	2	0	1	5	0	8
美術	2.6	3.1	5.3	1.9	6.3	4.3	3.3	4.0%
	1	1	3	2	5	12	1	25
工芸	2.6	0.0	5.3	1.9	1.3	1.8	0.0	1.9%
	1	0	3	2	1	5	0	12
写真	0.0	6.3	8.8	4.8	1.3	4.6	0.0	4.2%
	0	2	5	5	1	13	0	26
舞踊・ダンス	7.9	0.0	3.5	0.0	1.3	3.6	6.7	2.9%
	3	0	2	0	1	10	2	18
郷土(民俗)芸能	7.9	0.0	21.1	3.8	5.0	4.3	0.0	5.6%
	3	0	12	4	4	12	0	35
文学	5.3	12.5	3.5	1.9	6.3	7.1	3.3	5.8%
	2	4	2	2	5	20	1	36
生活文化	1.6	3.1	5.3	6.7	13.8	13.2	3.3	10.6%
	6	1	3	7	11	37	1	66
総回答者数(人)	38	32	57	104	80	280	30	621

(2) これから取り組みたい文化芸術活動のジャンルの割合(%)

※下段は回答された実数です。

ジャンル＼世代	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	総回答者数に占める各文化芸術活動に取り組みたい人の割合(%)
演劇・ミュージカル	13.2	9.4	7.0	3.8	6.3	1.8	3.3	4.3%
	5	3	4	4	5	5	1	27
オペラ・合唱	13.2	15.6	5.3	1.9	3.8	2.5	3.3	4.2%
	5	5	3	2	3	7	1	26
吹奏楽	5.3	9.4	5.3	1.9	2.5	1.1	6.7	2.7%
	2	3	3	2	2	3	2	17
映画	5.3	6.3	1.8	1.9	5.0	1.1	3.3	2.4%
	2	2	1	2	4	3	1	15
オーケストラ・室内楽	5.3	9.4	1.8	3.8	2.5	1.8	3.3	2.9%
	2	3	1	4	2	5	1	18
ジャズ	7.9	9.4	3.5	3.8	2.5	1.1	3.3	2.9%
	3	3	2	4	2	3	1	18
ポップス	7.9	6.3	3.5	2.9	1.3	1.1	3.3	2.4%
	3	2	2	3	1	3	1	15
ロック	2.6	9.4	3.5	3.8	1.3	0.7	3.3	2.3%
	1	3	2	4	1	2	1	14
民謡	0.0	9.4	0.0	2.9	2.5	1.8	3.3	2.3%
	0	3	0	3	2	5	1	14
美術	7.9	21.9	14.0	8.7	7.5	2.1	10.0	6.8%
	3	7	8	9	6	6	3	42
工芸	7.9	12.5	3.5	5.8	6.3	2.1	3.3	4.3%
	3	4	2	6	5	6	1	27
写真	7.9	25.0	3.5	8.7	2.5	2.5	6.7	5.3%
	3	8	2	9	2	7	2	33
舞踊・ダンス	15.8	6.3	5.3	4.8	1.3	2.1	3.3	3.9%
	6	2	3	5	1	6	1	24
郷土(民俗)芸能	5.3	9.4	1.8	3.8	0.0	1.4	3.3	2.4%
	2	3	1	4	0	4	1	15
文学	10.5	18.8	3.5	4.8	2.5	2.5	0.0	4.2%
	4	6	2	5	2	7	0	26
生活文化	7.9	21.8	5.3	7.7	11.3	2.5	6.7	6.3%
	3	7	3	8	9	7	2	39
総回答者数(人)	38	32	57	104	80	280	30	621

(3) 問題点

※複数回答可

	演劇・ミュージカル							オペラ・合唱						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	13.6%	18.2%	31.8%	15.9%	2.3%	18.2%	100.0%	10.0%	16.7%	33.3%	30.0%	0.0%	10.0%	100.0%
回答数	6	8	14	7	1	8	44	3	5	10	9	0	3	30

	吹奏楽							映画						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	2.9%	8.6%	25.7%	28.6%	11.4%	22.9%	100.0%	7.4%	7.4%	40.7%	22.2%	0.0%	22.2%	100.0%
回答数	1	3	9	10	4	8	35	2	2	11	6	0	6	27

	オーケストラ・室内楽							ジャズ						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	8.3%	16.7%	33.3%	20.8%	0.0%	20.8%	100.0%	2.9%	17.1%	37.1%	31.4%	2.9%	8.6%	100.0%
回答数	2	4	8	5	0	5	24	1	6	13	11	1	3	35

	ポップス							ロック						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	9.1%	15.2%	30.3%	27.3%	3.0%	15.2%	100.0%	8.8%	20.6%	29.4%	20.6%	2.9%	17.6%	100.0%
回答数	3	5	10	9	1	5	33	3	7	10	7	1	6	34

	民謡							美術						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	2.9%	8.8%	32.4%	35.3%	2.9%	17.6%	100.0%	7.5%	13.2%	28.3%	11.3%	28.3%	11.3%	100.0%
回答数	1	3	11	12	1	6	34	4	7	15	6	15	6	53

	工芸							写真						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	2.9%	11.8%	23.5%	26.5%	14.7%	20.6%	100.0%	6.5%	15.2%	30.4%	17.4%	15.2%	15.2%	100.0%
回答数	1	4	8	9	5	7	34	3	7	14	8	7	7	46

	舞踊・ダンス							郷土(民俗)芸能						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	0.0%	11.5%	26.9%	30.8%	7.7%	23.1%	100.0%	7.0%	14.0%	18.6%	39.5%	7.0%	14.0%	100.0%
回答数	0	3	7	8	2	6	26	3	6	8	17	3	6	43

	文学							生活文化						
選択肢	A	B	C	D	E	F	合計	A	B	C	D	E	F	合計
合計に占める回答数の割合(%)	9.7%	19.4%	35.5%	25.8%	3.2%	6.5%	100.0%	18.2%	6.8%	25.0%	22.7%	9.1%	18.2%	100.0%
回答数	3	6	11	8	1	2	31	8	3	11	10	4	8	44

選択肢一覧	
A.発表の場がない	D.仲間がいない
B.指導者がいない	E.材料・機材の専門店がない
C.学べる場がない	F.活動経費が大変

3 沿岸地域における文化芸術活動について

(1) 優れた文化芸術を鑑賞したり、自ら文化芸術活動を行ったりすることは、日常生活においてどの程度重要だと思いますか？

選択肢 / 世代（総回答数）	A.重要だと思う	B.どちらかといえば重要だと思う	C.どちらともいえない	D.あまり重要とは思わない	E.重要だとは思わない	無回答
10代（38）	52.6%（20）	18.4%（7）	15.8%（6）	0%（0）	0%（0）	13.2%（5）
20代（32）	46.9%（15）	37.5%（12）	6.2%（2）	6.3%（2）	0%（0）	3.1%（1）
30代（57）	49.1%（28）	24.6%（14）	14%（8）	7%（4）	0%（0）	5.3%（3）
40代（104）	41.3%（43）	45.2%（47）	8.7%（9）	0%（0）	0%（0）	4.8%（5）
50代（80）	45%（36）	40%（32）	7.5%（6）	0%（0）	0%（0）	7.5%（6）
60代以上（280）	56.8%（159）	23.2%（65）	4.6%（13）	0%（0）	0.4%（1）	15%（42）
不明（30）	30%（9）	13.3%（4）	3.7%（2）	0%（0）	0%（0）	50%（15）
計（621）	49.9%（310）	29.1%（181）	7.4%（46）	1%（6）	0.2%（1）	12.4%（77）

(2) 震災の記憶を次の世代に伝える為に、文化芸術活動を通して発信していくことは必要だと思いますか？

選択肢 / 世代（総回答数）	A.必要だと思う	B.必要だと思わない	C.どちらともいえない	無回答
10代（38）	73.7%（28）	0%（0）	2.6%（1）	23.7%（9）
20代（32）	59.4%（19）	0%（0）	28.1%（9）	12.5%（4）
30代（57）	54.4%（31）	10.5%（6）	22.8%（13）	12.3%（7）
40代（104）	56.7%（59）	3.9%（4）	26.9%（28）	12.5%（13）
50代（80）	63.8%（51）	3.8%（3）	16.2%（13）	16.2%（13）
60代（280）	54.6%（153）	1.8%（5）	7.2%（20）	36.4%（102）
不明（30）	43.4%（13）	3.3%（1）	13.3%（4）	40%（12）
計（621）	57%（354）	3.1%（19）	14.2%（88）	25.7%（160）

3 (2) 回答理由

「A.必要だと思う」を選んだ理由（抜粋）

・震災を忘れてはいけないと思うし、文化芸術は、身近だから。（宮古市・10代・女性）

・話を聞くだけでは分からないため、実際に表現したのを見る必要があると思うから。（久慈市・10代・女性）

・写真展や演劇などを通して伝えていければ、見る側も見やすく受け取りやすいのではないかと思う。（宮古市・20代・女性）

・年月が経過するにつれて震災の記憶が風化しているように思うので復興イベントを継続的に実施して欲しい。（陸前高田市・30代・男性）

・日常の楽しみや生活のうるおいのため、子どもたちの感性を育てるために必要。（大槌町・30代・女性）

・被災県である岩手県でさえ、内陸と沿岸の「震災に対する温度差」が悩ましい。文化芸術がその乖離を解消するツールになるのではないかと思う。（久慈市・50代・女性）

「B.必要だとは思わない」を選んだ理由（抜粋）

・震災をネタにしているようにしか見えない。ドキュメンタリーなどならまだアリだとは思うが、演劇とかは見たくない。（大船渡市・30代・男性）

「C.どちらともいえない」を選んだ理由（抜粋）

・震災の記憶とは別に考えるべきだと思うから。（釜石市・10代・女性）
・風化させない事は大切だけど、まだトラウマから立ち直れていない人も多いと思う。（宮古市・20代・女性）
・何かしら鑑賞に行く度、震災の話を持ち出されることに対して、精神的に負担に思う事が多くなった。文化芸術活動を通して発信していくことは大事だと思うが、節目の日に発信してもらう方が時間の経過と共に思い出し、考えることができるのではないかと思った。（大船渡市・20代・女性）
・使命感とか責任感というかそういうのを伴ってまでやるようなこととは思えなくて。（宮古市・30代・男性）

(3) 最後に、あなたが沿岸地域の文化芸術に求めるものはなにかを自由にお書きください。（抜粋）

・市民劇をもっと有名にしたい。（久慈市・10代・女性）
・若い人達が楽しめる場所を増やすべきだと思う。例えば、映画館、コンサート会場、など…（釜石市・10代・女性）
・地方にいても上質な芸術に触れる機会が欲しい。仕事、家庭があると、興味があっても遠くまで足を運ぶことが出来ず、芸術文化から遠ざかってしまう。（大船渡市・30代・女性）
・廃れてしまわないよう、文化芸術に誰もが気軽に取り組める環境づくりが必要。敷居が高く感じる。どこで学べるのかどの様に始めるのか等分かりづらい。情報が少ない。（釜石市・40代・女性）
・都市等で開催されている劇団四季等の本格的なミュージカル等観たくても、観に行けない方もいるので…来てもらえたら、とても嬉しい。そこから刺激を受けて、色々な活動に活かされていく事を期待したい。（大船渡市・40代・女性）
・後継者を適切に育成しなかったために消滅してしまった郷土芸能の例をいくつか見てきたが、今後もそのような事例は出てくると思われる。技を伝えるだけではなく、指導できる後継者を育てていくべき。特に高齢の指導者へのサポートは必要だと感じる。（大船渡市・40代・男性）

・PR不足！いろいろなイベントが有っても知らずにいます。終わってから広報などで知る事が多いです。PRの方法を改善した方が良いのでは？（宮古市・50代・女性）
・安らぎ、明るさ、元気、喜びなど。悲しい記憶を掘り起こして感動するなどは要らない。（田野畑村・50代・女性）
・郷土芸能など、その地域にしかないものの伝承が必要。少子高齢の時代で担い手不足が近々の課題なのでその辺を地区で考える必要がある。（大船渡市・60代・男性）
・宮古の高校にかつてあった演劇部がなくなりました。是非復活させて欲しい。（宮古市・60代・男性）
・すべてにおいて文化、芸術は県民会館、県立美術館、県立博物館などが盛岡に集中している為、関連イベントが内陸に多い。沿岸に住む私たちには不公平感がある。交通事情も悪く車を運転できない高齢者は指をくわえているばかりである。もっと沿岸で開催できるよう、配慮がほしい。（釜石市・60代・女性）

Ⅳ 現地の声

みやこ市民劇 ～復興から新しき文化の道へ～

みやこ市民劇ファクトリー　会長　　冨　田　淳　治

■芸能と鎮魂

東日本大震災。その後の台風10号、19号による被害。三陸沿岸の自然は大変厳しい。人が海に向かって、営々とつくりつづけた生活の場。それを一瞬にして、元の原始の姿へ引き戻してしまう。リアス式海岸で平地の少ない、そしてやませの冷害にさらされる沿岸は稲作には適さない。縄文の時より狩猟採集が命をつなぐ主な生活手段であったはず。多くの恵を自然からもらいながら、同時にすべてを自然に奪われる。その繰り返しこそが沿岸の歴史であったのではないか。

震災後、まだ瓦礫が残る中、いち早く郷土芸能が再開した。避難所にいる大勢の市民が、感動し涙し、生きる力をもらった。
「やらないと街そのものがなくなる」
「これからもこの地で生きてゆく証だ」
そんな強い思いが郷土芸能に託され、立ち上がったという。

もともと、郷土芸能は、死んだ人や獣への鎮魂、供養から生まれた。農耕に適さず蓄えがきかない、日々の猟採集生活の中で、食うか食われるか、その厳しさの中で命をつないできた人々。そのためであろう、岩手県には人と自然を区別しない、互いに平等であり互いに生かされていることを感謝する風土がある。大きな命の連鎖の中に生きている自覚。それは、平泉に藤原清衡が築こうとした現世浄土の思想であり、宮沢賢治「なめとこ山の熊」の世界感と同じだ。

飢饉と戦ってきた過酷な地域ほど、郷土芸能が盛んだったという。つらさ、悲しみを芸能へ転嫁した。郷土芸能は、死者と生者の心をつなぎ、地域と人をつなぎ、地域結束の象徴といってもいい役目を担ってきた。

市民劇の役目も、郷土芸能と本質的には同じではないか。郷土芸能をも取り込みつつ、より多様な題材が可能な祝祭の場。経験を問わず参加が容易で、それまでにない市民層が集う全く新しいコミュニティの場となっている。

■市民劇と復興

今日の宮古市で、市民劇に最も期待される役割は、心の復興である。
では、果たしてこの３年間、どのような成果をもたらしたのだろうか。

2018年2月第一回『拓け、いのちの道を～鞭牛和尚の挑戦～』では、道づくりが、人の生活にとってどれほど大事なものか、それを、宮古盛岡復興支援道路の完成を待ち望む宮古市民の願いと重ねて描かれた。

第1回みやこ市民劇「拓け、いのちの道を～鞭牛和尚の挑戦～」

2019年3月宮古西道路完成式では、知事をはじめとする来賓の前で、市民劇参加者が「拓け、いのちの道を」のテーマ曲を歌った。実際に道づくりに従事している関係者各位の功績をたたえ感謝することができた。工事関係者一人一人こそが鞭牛だ、今も宮古には鞭牛が生きている、そう実感した。

2019年1月市民劇ファクトリーによる初の自主公演では、『ひらけ！笑顔と希望の鉄の道』と題して、三陸鉄道の震災復興からリアス線の全線開通までを音楽朗読劇として公演することができた。同年3月23日全線開通の祝賀パーティーに招待いただき同テーマ曲を多数の来賓の前で披露できた。沿線市民の気持ちを歌に込めた。

2020年2月第二回みやこ市民劇『鍬ケ崎エレジー～激闘！宮古港海戦～』では、150年前の鍬ケ崎のにぎわい、歴史遺産である宮古港海戦の意義を再確認し、新しい道をもとめて立ち上がる人々を描く群像劇となっている。2018年6月宮古室蘭のフェリー就航により、海の道が新たに誕生したことにも重なる。また当時の芸者街で一番人気の流行り歌「大漁踊り」が劇中で復活する。貴重な文化遺産を守ってゆくのは、市民劇のもう一つの大事な役割である。

2019年度は、釜石ラグビーの開催もあって、物心両面で復興が大きく前進するかに見えた。

予想だにしなかった。台風19号の影響で三陸鉄道が全線開通から1年もたたないうちに約7割の区間が被災し不通となった。

異常気象が続いた。沿岸のなりわいにとって重要な、さんまさけの不漁もその影響なのだろうか。自然は想像をはるかに超えて厳しい。

更には、宮蘭フェリーは、2020年３月末をもって休止が決定した。インフラが整備されただけでは、その有効利用なくしては復興とはなりえないとの厳しい現実を突きつけられた。落胆は非常に大きい。

こんな時だからこそ、もう直ぐ開幕する第２回みやこ市民劇で、困難に立ち向かう人物の姿をとおして、前作以上の感動を届け宮古市に元気をとり戻さなければならない、そう痛感した。

■持続する文化育成へ

私は、第２回市民劇の結団式で、次のようなことを、皆さんに伝えた。

「厳しい自然と共生をしてきた、沿岸の人々は、たくましくも強い。普段みなさんは決して、その強さを誇示しない。うちに秘めた、矜持といってもいい。にじみでる強さ。そしてその強さからくる、やさしさにみちた人たち。

今回の芝居は、苦難にたちむかい諦めない、新しい道を拓く人々の物語です。

過去の歴史をなぞる話ではありません。現実と乖離した絵空事でもありません。

今に生きる、私たち市民による、市民のための物語です。

皆さんは、強い人たちです。その強さを、是非前に進む力にかえてほしい。それが、できる人たちです。ともに、手を携えて、前に進みましょう。」

現実は、厳しい。これから、もっと厳しくなるであろう。

人は文化なくして生きてはいけない。文化は人と地域をつなぐ。そして、過去と未来をもつなぐ。文化が心の復興にもっとも近いのは、そのためだ。

市民の手で、しっかりと市民劇という名の文化を育てなければならない。みやこ市民劇は、まだまだ支援と経験が必要だ。課題は多い。

しかし、宮古の人々は強い、それらを解決し前進する力を持っている。

大地に深く根付いた文化は、いかなる風雪に見舞われようとも負けない。再び芽をふき枝を伸ばす。必ずや、新たな花を咲かせるであろう。

第2回みやこ市民劇「鍬ケ崎エレジー～激闘！宮古港海戦～」

コンサートキャラバンに参加して

いわてフィルハーモニー・オーケストラ　クラリネット奏者　　木戸口　夏　海

この度、コンサートキャラバン2020に参加させていただきました。今回のコンサートキャラバンでは、東京からヴァイオリン奏者の竹原奈津氏、ヴィオラ奏者の齋藤彩氏、チェロ奏者の宮坂拡志氏の３名と、いわてフィルハーモニー・オーケストラからヴァイオリン奏者の齊藤弦氏、フルート奏者の村野井友菜氏の２名と一緒に演奏させていただきました。

弦楽器との室内楽は初めての経験でしたし、何よりも日本を代表するプレイヤーの方々と共演し、勉強する機会を頂けたことを光栄に思います。キャラバンは、小澤征爾氏とチェロ奏者のムスティラフ・ロストロポーヴィチ氏が、若手の演奏家を岩手に連れてきて、若手の演奏家の育成、生の音楽に触れる機会の少ない方々にもクラシック音楽を気軽に楽しんでもらったりしたいという思いから始まったそうです。2002年から始まったこのコンサートキャラバンですが、2011年に起きた震災以降もたくさんの演奏家が岩手を訪れて心の復興のために感動を届けてくださいました。

東日本大震災が起きた2011年、私は中学３年生でした。内陸に住んでいたので大きな被害はありませんでしたが、県内の沿岸地域の被災状況は毎日報道され、未曾有の大災害だったと分かりました。しかし、当時は被災した方々の力になりたいと思っていても、自分の身の回りのことしかできず、無力さを痛感しました。

それから高校に入学し、中学校の頃と同じ吹奏楽部に入部しました。コンクールに出場したり、コンサートを開いたり、吹奏楽を続けていくうちに、私が小さい頃から触れてきた「音楽」こそが人々の心の支えになるのではないかと考えるようになりました。そこで、専門的な勉強をし、まずは良い音楽を届けられるように自分自身を変えていこうと、音楽大学に入学しました。いつか地元に戻ってきて、たくさんの方々に音楽を届けていきたいと思っていました。そんなとき、コンサートキャラバンのお話をいただきました。

いつもはコンサートホールで演奏会を行いますが、多くの方々に生のクラシック音楽を近くで聴いていただきたいという思いから、コンサートキャラバンは保育園やお寺、施設などに出向いて演奏します。

保育所では、２歳から６歳までの子供たちに演奏を聴いてもらいました。どの子も、一つ一つの楽器の音を生で聴いたり、室内楽の演奏を聴いたりするのは初めてだったと思います。それでも、リズムに合わせて身体を動かしたり歌ったりして、純粋に音楽を楽しんでくれていました。まだ言葉が話せない小さい子どもたちでも、音楽を通じて会話ができたように思いまし

コンサートキャラバンの様子（あかまえこども園）

た。私たちの演奏が音楽を好きになるきっかけとなれば幸いです。

お寺や施設では、クラシック音楽だけではなく、演歌や3.11の復興支援ソングにもなった『花は咲く』などの演奏を、幅広い年代の方々に聴いていただきました。こちらでも、近くで生の演奏を聴いたことが少ない方が多くいらっしゃったので、演奏できることを嬉しく思いました。

演奏後には、「今まで辛かったけど、演奏を聴いて元気になれた」「また演奏を聴かせてね」と、多くの方々から声をかけていただきました。中には、涙を流しながら感動したと伝えてくださった方もいらっしゃいました。

今回、岩手県民ながら宮古を訪れるのは初めてだったのですが、震災や台風被害などから、現在に至るまで、どのように復興してきたのかし続けているのか気になっていました。短い期間でしたが宮古に訪問する機会を頂けて、少しずつ進んでいるのを感じる事ができましたが、まだまだ地元の皆さんの気持ちも含め復興するには時間が要するのも感じました。

このキャラバンの活動を通して、自分が今まで体験した事の無い環境で演奏する機会を頂きましたが、どんな環境でも聴く方に喜んでもらえる演奏をするにはまだまだ勉強不足だなと痛感しました。更に経験を積み皆さんの気持ちに寄り添えるような演奏ができるように、岩手県を中心にもっともっとクラシック音楽の良さや私たちにしかできない音楽を届けていきたいです。

そして今後、もっと色々な場所に出向いて演奏する機会を作り、沢山の演奏家が岩手県を訪れてくれるように尽力していきたいと思います。

岩手県から音楽家がもっと生まれて一緒に活動してくれる仲間が増えることを期待しています。

コンサートキャラバンの様子（健やかホール）

市民参加劇勉強会・朗読劇ワークショップ　参加体験記

本　田　敬　子

夫の転勤に伴い震災後に釜石に移り住んだとき、震災を経験した人たちに交じって生活することに、私はちょっとした怖れを持っていました。釜石では殆どの方が親族または知人を震災で失うという経験を持っており、その喪失感を安易に「わかります」とは言えないし、またその事実に無関心でもいられないからです。しかし釜石の新参者としてコミュニティの一員となるには、まず親しく付き合える友人を得ることが第一歩であるのは自明です。そのために流行りの言葉で言うと、震災を知らない私は本当の意味でシンパシーを持つことは困難だということを自覚し、せめて想像力を持ってエンパシーに努めたいと思いました。

釜石に来る以前から、学校や保育園、公民館、仮設住宅などで紙芝居を演じたり唄を歌うなどの活動をしてきた私は、釜石でも読み聞かせグループに入れていただきました。また「語り」のグループにも縁あって、活動を始めました。そこで新たな人間関係ができ、この地のことを学ぶ手始めとすることとなったのです。活動をきっかけとして個人的な付き合いに発展し、日常生活のふとした言葉や態度から震災が生き方に齎した影響を感じることがあるのです。

ところで新たな人間関係を必要としているのは、私のように外から来た人間だけではありません。釜石に長年住んでいる方々も、震災によるコミュニティの崩壊で新たなつながりを求めています。

今回の「いわてアートサポートセンター」のイベントにはすぐに参加してみたいと思ったものの、釜石市での日程には私事により都合がつかず、陸前高田での開催に出向きました。そのことがかえって幸いだと思ったのは、既に釜石では市民参加劇の実績があるのに対し、陸前高田では一から立ち上げる過程を見られるかもしれないと考えたからでした。

コーディネーターの坂田さんは、岩手県内の他の事例を紹介するものの、「こうやってやれば市民劇は出来ます」というようなことを安直に指し示すのではなく、「どうやったら陸前高田で市民参加劇が実現できると思いますか」と参加者に考えてもらうというスタンスで進められました。演劇人として豊富な経験をお持ちですが、優れた芝居を作るということ以上に、新たなコミュニティを構築して地域を活性化させることがこのプロジェクトの肝心な点であるからでしょう。また陸前高田のことは陸前高田の地元人がいちばんよく知っているという思慮もあるようでした。単に芝居公演をすることが目的なら強力なひとりのリーダーが引っ張っていけばよいのでしょうが、市民参加劇ではひとり一人がプロジェクトの主役となり、各人の人生に寄与することが目標となるのでしょう。

市民参加劇勉強会（陸前高田）の様子

そんな思いは、二日目の朗読劇ワークショップにも表れていました。朗読劇はとっかかりとして芝居よりずっとハードルが低そうです。けれどまずプロによるパフォーマンスを鑑賞することによって、単なる簡易芝居ではない朗読劇の魅力を知ることができ、また参加者の意欲が一層掻き立てられるという点でもよかったと思います。

その後、その場で配布された脚本を使い、早速朗読劇に挑戦してみることとなりました。ほとんど初めて会った人ばかりでグループ分けし、練習時間もごく短かかったにも関わらず、吟味された題材によってそれぞれのグループの特徴が出て、他のグループの発表を見ることにも味わいがありました。欲を言えばせっかく専門家に聴いていただける機会でもあったので、読み方などにもう少し細かなアドバイスをいただきたかったようにも思いましたが、今回の場合はまず「楽しむ」ことの方が重要視されていたのでしょう。

ところで、私は読み聞かせ活動の一環として、重度心身障害者の施設にもときどきお邪魔していますが、ふつうに絵本などを読むだけでは十分に興味をもっていただけないと感じることがしばしばありました。今回やってみた「朗読劇」という手法はいつもの読み聞かせに変化をもたせられそうで、次回に施設を訪れるときにぜひやってみたいと思っています。音楽や効果音を組み合わせることで少しでも豊かな刺激を提供出来ればよいですし、今回のワークショップを参考に演出をあれこれ思案しているところです。

最後に、釜石の語りの会では、年に一度の発表会の際、各メンバーの語りのほかに全員で昔話コントのようなこともやっています。きちんとした台本もなく語りのオマケのようなものですが、地元の昔話を演じるのでよく知ってる地名が出てくるし、知ってる人が演者であることで毎回観客を沸かせます。市民参加劇はプロのパフォーマンスとは異なる観客との一体感があります。観る人にも「おらほの芝居」と感じてもらえたら、より広い意味での市民参加劇となるにちがいありません。

朗読劇ワークショップ（陸前高田）の様子

「いわて震災小説2020」の発行に携わって

作家・ジャーナリスト　外　岡　秀　俊

いわてアートサポートセンターではこれまで短歌、詩、エッセイと、毎年違うジャンルの文学作品を公募し、入選作品集を発行したうえで毎年３月に朗読劇を上演してきた。

今回は「いわて震災小説２０２０」と銘打って、小説を公募した。2019年に応募要項を発表し、その年11月までに51編の作品が事務局に寄せられた。うち36編が事前審査を通り、12月12日に盛岡市で審査会を開いて入選作を決めた。審査委員の一人として36編を通読し、審査会に臨んだ立場から、その経緯と感想を記してみたい。

今回の応募要項は東日本大震災以降に書かれ、震災やそれ以降の情景、心の動きをテーマにした小説ということだった。2000字以内という条件が付けられたので、いわゆる「掌編小説」である。川端康成が「掌の小説」として短編よりも短い小説集を刊行したことで有名になったジャンルだ。どれほど短くても単独で完結し、自立していることが条件だ。

これまで実施してきた短歌、詩、エッセイとの違いは何だろうか。短歌は５・７・５・７・７の歌体による短詩で、心や感情の揺らぎや情景を直接表出するところにその特徴がある。詩は一般に、その定型からはずれ、自由に心や情景を綴る韻文といえる。定型を重んじる短歌とは違って、言葉の連なりや象徴よりもむしろ、暗喩や直喩を駆使して、それぞれの言葉の奥行きや深さを表現し、出来事や抒情のイメージへと導くところに要諦があるといえるだろう。散文に属するエッセイは、いわゆる身辺の出来事に触発された心の動きを、その赴くままに記録する雑記である。

小説は、同じ散文であっても、エッセイとは違う。たとえ「私」が登場しても、作者が作品に居残ってはならない。つまり創作であり、虚構である。裏を返せば、作者が誰であろうと、それ自体で自立し、作者の「素顔」が見えない点でエッセイと区別される。

振り返ってみれば、サポートセンターが以上の順で公募をしてきたことには十分な根拠があったように思える。感情表出の直接性においてはその順によって弱まり、その分だけ、体験から遠ざかっていく。つまり、イメージが結晶するまでにはそれなりの時間がかかる。

震災のように極度の非日常に直面した体験は、日常の堆積である人生を撹拌し、混乱をもたらす。時間が経つにつれて日常は再編され少しずつ落ち着き始めるが、失われた人々や故郷の風景は戻ってこない。被災地以外の人々の目には復旧復興が進んだように見えても、被災を体験した人々の痛みや苦しみ、喪失感は容易には癒やされないことが多い。むし

（左から）斎藤純氏、外岡秀俊氏、坂田裕一氏

ろ、歳月を経て多くの人々が忘れることで、その断絶や孤立は深まっていく。

第二次大戦後、「ホロコースト以降に文学は可能か」という論争が起きた。人類が自ら、表現不能な災厄を引き起こしたあとで、なおも文学に可能性はあるのか、という問いかけだった。東日本大震災にも、同じようなことがいえるのかもしれない。だれが「あの日」起きたことを、文字に定着できるだろう。

だが、裏を返していえば、体験から時間を経て初めて見えるもの、表現できるものがあるようにも思う。たとえば被災地では多くの人が、失った人々の姿や声を見聞きしたという。それはただ、錯覚や心霊体験として切り捨てていいことだろうか。むしろ亡き人を慕う思いの強さや切なさが積み重なって伝承や説話、物語となり、世間の忘却に抗い、歳月を超えて次世代に引き継がれる民衆記憶となっていくのではないか。

歳月は災厄の混乱を鎮め、記憶を風化させる。しかしその一方で歳月は感情や思いを結晶化させ、人々の個々の体験を、同時代、次世代にも共有できる記憶に鍛え上げてくれる。その意味で、「あの日」から遠ざかるほど、文学、演劇、音楽、美術などの必要性は高まるし、芸術は「あの日」以後を生きる人々の支えになるだろう。賢治の「銀河鉄道の夜」がいまだに私たちの心の支えであるように。

審査にあたって私は、これまで述べてきた理由から、作品が震災後の「時間の重さ」をどれだけ表現しているかを、選考の基準にした。最優秀作「片寄波」と、これに甲乙つけ難い優秀作「旅の終わりに」、「あの日から」は、いずれも９年という歳月の重みを耐え抜き、読者に深い感慨を抱かせ、希望をもたらす作品だった。粒よりの作品に審査員は全員、創作と知りながら、涙なくして読み終えることができなかったと口をそろえた。長い苦痛や煩悶、絶望に救いをもたらすのも文学の力だと思う。文化は何の役にも立たない。そういう人もいる。だが食べたり呼吸したりする以外に、人を癒し、支えるのは文化だけだろう。そう再確認する機会を与えられたことに、深く感謝したい。

選考会の様子

伝える

いわて震災小説2020　最優秀賞受賞者　　本　堂　裕美子

この度、「いわて震災小説 2020」最優秀賞を頂きました。審査員の皆さま、今までご指導下さった方々に心より感謝します。

東日本大震災という未曽有の災害を身近で経験して以来、それぞれが考え、感じ、想いを深めていったことでしょう。そんな想いを綴る機会を得た事にも感謝です。

大震災は、詩や童話を書き、読み聞かせボランティアをライフワークにしていた私にとっても、あまりにも衝撃的な現実でした。

自分に何が出来るのか、暗中模索の時に目にしたのが「いわて震災詩歌 2017」の募集でした。

すぐに「書いてみたい」とは思いましたが戸惑いや気遅れも大きいものでした。

私は被災地に暮らしてはいても被災はしていません。ライフラインの影響も最小限の地域に住んでいます。何も、誰も失くしてはいません。

故郷北海道には地震や津波の伝承もありませんでした。（今では以前はとなりますが）

震災後、私の住む団地内の数か所の公園にも仮設住宅が建てられました。

その頃、犬を飼っていた私は、毎日の散歩の度に肩身の狭い想いを募らせていました。

大変な経験をし、大切な人や物を失った方の目に、のんきに犬の散歩をしている私はどのように見えるのだろう。こんなことをしていて良いのだろうか。

そんな気持ちを和らげてくれたのが被災して、犬と仮設住宅に住む方々でした。

犬の話題で知り合い、挨拶を交し、被災時の様子などを聞かせてくれるようになりました。

被災をしていない私の気持ちの方が助けられていました。人は優しくて強いものだと教えられました。

そんな今の気持ちを書いておこうと応募しました。「いわて震災エッセイ 2019」も同じ想いで応募し、どちらも活字にして頂くことが出来ました。

そんな時に思い出したのが、娘の小学校の担任だったA先生のことです。

先生には、二度の津波を経験したお母様がいらっしゃいました。そのお母様の話を、折に触れて子供達に聞かせていたようです。

「先生は地震があったら、夜中でも高い所へ逃げるそうだよ。家族みんながそうしているって」

娘の言葉に頷きながらも、全く心に留める事の無かった母でした。

震災後、偶然、お母様の少女の頃の作文を読む機会がありました。新聞等にも何度か取り上げられていました。

それらを読みながら、自分の無知を恥じました。

この地に終の住処を構えるのなら、地元の負の歴史にも関心を示すべきでした。

先生が一生懸命子供達に伝えようとし、子供が家で話題にしても、親が無関心では意味がありません。

子供が誰かの意見に耳を傾け、想いを受け止め、理解するためには親の姿勢が大事です。

気づくのが遅すぎましたが、子供は我子だけではありません。孫もいます。読み聞かせをしている子供達もいます。

子供の本が好きで、子供に沢山の本を届けたいという気持ちで続けている読み聞かせにも震災は影を落としました。

海の絵本、震災を思い出させる本を読むことを躊躇いました。

読み聞かせを初めて以来、好きで手にしてきた絵本を遠ざけるようにもなりました。

子供の力を信じて……という意見に心が動くこともありましたが、傷つく子がいるかもしれないと、海の絵本を手にすることのできない日々が続きました。

「震災小説」を書く際にも、被災した子供の気持ちを考えていました。

忘れない、寄り添うと言葉で伝えることの虚しさのようなものを感じてもいました。

それでも発信し続けることは大事です。

もうすぐ九年。

震災の二日後、瓦礫の街と化した宮古を車の窓から見て「なにもないね……」とつぶやいた孫が中学生になり、車の中で熟睡していた下の孫が五年生です。

被災した子供達はもっと沢山の事を考え、感じ、経験を積み、力強く成長しています。

短い小説ですが、しなやかに強い子供を描いてみたいと思いました。

子供の成長には、見守り、理解し、時にはそっと手を貸す大人が必要です。

発信し、伝える為には受け止めてくれる存在をも育てなければならないでしょう。

その為には教師、父兄、地域の大人達のコミュニケーションが重要になります。

私達に出来る事はまだまだありそうです。

いわて震災小説2020　入賞作品授賞式
（左：本堂裕美子さん、右：坂田裕一理事長）

Ｖ ま　と　め

まとめ
「次の10年へ、災後に強い文化芸術を育てる」

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター　理事長　坂　田　裕　一

はじめに

震災から９年。

私たちは、４年前から文化芸術を核とするコミュニティづくりを、５つから４つのテーマ毎に課題と方向性を提言してきた。

平成27年度は『心の復興』を第一義として、「伝える」「学ぶ」「交流する」「出かける」「新たに興す」の５項目。

平成28年度は、心のひだに強く張り付いた苦悩と失った命の叫びの向かう先を求めつつ、子どもたちが明日を信じて生きていくために、コミュニティを再生させるために、ふるさとに誇りを持ち続けるためにと、「伝える」「学ぶ」を継承し「育む」「出かけ交わる」「興し参加する」を加えた５項目。

昨年度、平成29年度は、刻々と変わるニーズに対応し、より強いコミュニティづくりと、次世代育成の展望を見据え、「語り継ぐ」「広く深く学ぶ」「交流し育む」「参加し継続する」の４項目で提言し、平成30年度は、持続可能なコミュニティづくりへ、という主題で、「学び続ける」「交流し続ける」「語り継ぎ続ける」「参加し続ける」の4項目で論述した。

本年度は、新型コロナウィルス問題という新たな課題も生まれ、「より強く」「より柔軟」な活動ができる文化芸術のあり方についても論究したいと考え、昨年の提言４項目に加え、「集い続ける」を加えた５項目で提言する。

語り継ぎ続ける

震災文学の公募は「詩」「短歌」「エッセイ」と続き、本年度は「掌編小説」（短編小説よりごくごく短い小説）を公募した。

エッセイの公募でも明らかになったのは、人々の心の中に深く沈降している思いが、たんなる「思い出」という生易しいものではなく、「心の底からの訴え」でもあるということだった。

一昨年の提言では次のように記した。

「風化されつつある震災の記憶を忘れて欲しくないという被災地からの悲痛な叫びは、小説や詩歌、エッセイ、映画・演劇など文化芸術の力によってこそ、効果を倍加させることができるのだろう。

そしてなにより、こうした作品を語り継ぐことこそ大切なのである。文化芸術は、そのジャンルを越えて融合し、より効果的に伝えることができる。……そして、心の底に沈降した思いを浮上させるには文学の力は欠かすことが出来ない。同時に、その浮かび上がる思いを語り継ぐには、言葉や文字だけではなく、多様な文化芸術の力が必要だ」

掌編小説の朗読劇では、そのことを証明してくれた。ピアノ演奏に乗せて役者たちが語る物語は、より立体的に言葉を浮き上がらせた。

令和２年度以降も語り紡ぐ活動は途切れることなく続けたい。そして、それは広く被災地以外にも広めることであり、幅広いジャンルとのコラボレーションによってより深い共感を得ることが出来ると考える。

朗読劇ワークショップ（釜石）

学び続ける

一昨年度の芸術文化の学びの場にかかるアンケート調査では、数年前から言われ続けている生活文化から、美術・音楽・演劇といった芸術文化まで、深刻な指導者不足、担い手不足を証左する結果となった。

そのため、昨年度、担い手不足については、公民館や文化会館による講座の充実が必要であること、指導者難については、文化会館や公民館と個人教師が連携する方向性や内陸等県内外を含めた招聘も考える必要があると提言したが、中長期の継続的な講座では、指導者自身のスケジュールや、移動にかかる経費負担の課題が生じる。沿岸被災地では、それを工面する経済的余裕がまだないことから、地域全体、社会全体で補う知恵が必要であると記した。

このことは一朝一夕に解決することではない。今後とも地道な活動の展開が必要である。

今年度は、沿岸全域の文化芸術活動にかかるニーズ調査を実施した。回答数は621名。文化イベントや諸会議、講演会等において調査を実施したので、比較的文化芸術に興味がある層へのアンケートであるが、600人以上という数は、県政モニター数より数多く、20代以下も12%と少なくないことから沿岸地域の文化芸術のニーズを図る上では十分に参考になり得ると考える。

ジャンル別の傾向では、過去３年間の鑑賞体験で、演劇・ミュージカル、オペラ・合唱、映画、オーケストラ・室内楽、吹奏楽、郷土（民俗）芸能の６分野で、30.1%から34.9%とほぼ30%台前半に集中している。また、これから見たいジャンルでは、演劇・ミュージカルが35.8%と一番多く、鑑賞体験30%以上のジャンルでは、オペラ・合唱、映画、オーケストラ・室内楽が、20%台に、民謡と吹奏楽が10%台に落ち込んでいる。また、鑑賞体験10%未満だった、ジャズ、ポップス、ロックが10%台後半から20%台前半に増えている。

このことから、ジャズ、ポップス、ロックの各ジャンルのニーズに対して鑑賞機会は少ないこ

とがわかる。演劇等が両方多いのは、市民劇等で鑑賞者は多いが、鑑賞機会はまだ不足しているとのことだろう。

改善点の希望では、開催回数の少なさを訴えているのは、各ジャンル40%前後に集中し、30%未満は、民謡、舞踊・ダンス、郷土（民俗）芸能の３分野のみである。

次に、文化芸術に取り組んでいる人の割合は、一番多いジャンルで書道・茶道・華道などの生活文化で10.6%。次にオペラ・合唱の7.7%、演劇の7.2%と続く。最も鑑賞体験が多かった吹奏楽（34.9%）が3.8%、オーケストラ・室内楽（32.2%）がわずか1.8%と低くなっている。演劇や合唱は、いわば身一つで表現活動に参加できるに対し、吹奏楽や室内楽は「楽器の習得」が必要というハードルがあるからだろう。また、これに対し演劇が多いのは、俳優以外に多様なスタッフが参加可能だからと思われる。

問題点を挙げると、美術の「材料・機材の専門店がない」が28.3%と他分野を圧倒して目立つ。また「学べる場がない」と答えたのは、文学の35.5%を筆頭に、30%を超えた分野は、演劇・ミュージカル、オペラ・合唱、オーケストラ・吹奏楽、ジャズ、ポップス、民謡、写真などで担い手不足を訴えている郷土（民俗）芸能は18.6%、生活文化は25%と少なくなっている。

また、「仲間がいない」と答えた筆頭は、郷土（民俗）芸能の39.5%で、他で多いところで30%前後だから、郷土（民俗）芸能が閉じられている傾向を見ることができる。

これらのアンケート結果から、「学び続ける」ための方策は、ジャンルによって異なることがわかるが、総体としては「学べる場」の確保が必要であり、郷土（民俗）芸能については、参加できる範囲を広げることが必要である。

交流し続ける

一昨年から主張してきた交流の必要性は、次の３点でまとめ論じてきた。

① 地域間の交流（出かけ交わる）

震災以前、内陸部と沿岸部の文化交流は薄かった。距離的難点が交流を疎遠にしていた。震災の支援活動によって交流は飛躍的に深まり、交通網の整備も進んでいる。しかし、支援活動が縮小しつつある中、交流自体も縮小する可能性もある。地域間の人的交流促進は欠かせない。

② 世代間の交流（ともに育む）

地域内の民俗芸能は世代間交流の最たるものだが、現代的な表現においても世代間交流は必要である。特に、集団で作り上げる演劇や伝承が欠かせない民俗芸能は、意図的に世代間交流をすすめる必要がある。

③ ジャンル間の交流（刺激し合う）

異ジャンルの交流も大切だ。三陸国際芸術祭はコンテンポラリーダンスと民俗芸能の交流から生まれた。さらに、他国との芸能交流も生まれている。「語り続ける」ことにも通じるが、震災からの記憶の発信は、文学や演劇人に委ねるだけではなく、住民自らが表現活動を外部に発信させることも必要である。

また、昨年は交流と文化芸術体験から活動継続への持続可能なシステムが立ち上がっていないことによって、アーティストによる震災支援活動が一過性に終わり継続していないことを述

べた。このことは経済的な面においても厳しい。ただし、レジデンスするための宿舎、交流のメニューづくりを整備することで、交流は一歩前進するのではないかとも思う。

宮古市と二戸市の市民劇交流はゆっくりだが着実に進んでいる。相互鑑賞、相互出演、スタッフの相互研修が本年度実現した。遠距離で片道３時間近くの時間を要し、簡単に交流できる距離ではないが、それでも交流を深めようとする相互の努力には脱帽する。

今後は、この交流を「共同創造」や「相互公演」の域まで高めることが求められる。

二戸と宮古の市民劇交流
（二戸市民文士劇公演）

参加し続ける

今年度は、沿岸地域の市民劇の振興のために宮古、釜石、陸前高田市等で支援活動を実施した。

昨年度、待望の新しいホールができ、仮設催事場からホールに復帰できた釜石市の市民劇「釜石市民劇場」は、昨年度は、ホール側との意思疎通が悪かったせいか、思うような舞台成果を上げられず集客も今一つだったが、今年度は館長の交代ということもあり、ホールと市民劇の関係も改善され見違える成果を上げた。

遠野物語ファンタジーからの県内市民参加劇の伝統である「自治体・ホール・市民の協働」が大切であることが証明できた。

市民参加劇は、多くの市民が主体的に参加できともに築き上げる「文化の祭り」でもある。

第二回のみやこ市民劇も成功裡に終了したが、新たな課題も見えてきた。

等しくシロウトだった一回目から、二回目になると次第に参加者間で経験や技術の濃淡がでてくる。頑張るがゆえに意見の相違も顕在化する。

地道な仲間づくりと互いにぶつかり合いながら信頼感を高めあうことが理想的だが、その陰でどうしても意見が合わず大切な仲間が離れてしまうという負の面も見過ごせない。

宮古では外から演出家が来る方が、地元演出よりもまとまるだろう、という意見もいただいた。とりわけ、カリスマ性や豊富な演出経験がある人が望ましいと。実際、二戸市でも最初はそうだったが、５年間で地元演出にバトンタッチをすると決め、そのための準備を経て、今年度、二戸の市民劇は地元演出で公演を実現させた。もちろん、課題は少なくなかったが、この経験が地域全体の財産となって、地元演出の道が拓かれるだろう。

宮古でも、次回は「演出」を育てるプログラムに突入することが望まれる。

一昨年提言した、持続可能な市民劇のための10項目を再掲する。

① 市民による舞台技術やスタッフワークの継続学習
② 地域素材に関する掘り起こしと磨き上げ

③ 出演者の基礎練習の継続
④ 市民メセナ（市民や民間団体からの資金援助）の確保
⑤ 公的助成金の申請
⑥ 文化会館内あるいは市内でのストックスペースの確保
⑦ 文化会館職員の協力体制
⑧ 市長等市内有力者の理解
⑨ 自由に集える場の確保
⑩ 市民参加劇をコミュニティとする市民の組織

第２回みやこ市民劇

集い続ける

文学や美術などの作品づくりは「個」の作業によるところが多いが、演劇や室内楽、合唱、ダンスなどの他分野では集団でつくりあげることが多い。この中で、大切になってくるのが「集まり続ける」ということだ。

人の集まりは脆い。ふとしたすれ違いで集団は霧散してしまう可能性がある。忍耐と辛抱も集団維持のために必要である。同時に、集団の維持だけを目指すと自由闊達な創造へむけてのせめぎあいが出来なくなり、活動の低迷を招く結果となる。

自然体で集まり、自由闊達な意見交換を可能にするのは「集まる場」の確保である。指導者やリーダーの存在も大きいが、「集まる場」の有無はそれにまして大きい。場は出入り自由な「広場」であることが望まれる。

沿岸被災地では震災直後、ホールや公民館などの「場」が消失した。今年４月の陸前高田市民文化会館の復活をもって、県内の「場」は一応ひと段落した。

だが、「場」はたんなる「場」で終わるか、「広場」として集まり続けることが可能な場に育つかは、その管理運営者と市民の協働が実現するかどうかにかかっている。安上がりな管理中心主義をとる管理運営では「集まり続ける場」とはならない。市民の監視が必要だ。

協働の運営を行う秘訣は、「仲間」になることだ。市町村長もホールの運営者も市民も「みんな仲間になって文化を作り上げるところだ」という意識を持たねばならない。そのための支援活動が必要である。

令和２年になって「新型コロナウィルス」の問題が顕在化し、「集まる場」が確保しにくくなってきている。「集まることが悪だ」という風潮も見える。これはコミュニティの崩壊、文化芸術の衰退に直面する。集まり続ける勇気を持続し、安心安全に集まる場を確保していくためにはどうしたらよいか、多くの人の知恵と努力が必要だ。

おわりに

昨年の提言書の中で「文化芸術による持続可能なコミュニティづくりは、文化芸術の役割をたんに個々の表現活動の範囲としてとらえるのではなく、『文化芸術によって生み出される様々な価値を……観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない』（以上、文化芸術基本法）という視点から考えなければならない」と述べた。

未曾有の大震災の傷はとてつもなく深く、それを癒すには相当の時間を要する。さらに今般の新型コロナ問題は、復興途上の被災地の文化復興に大きな障害を与えようとしている。確実に、文化復興への時間は延びていくだろう。その中で、考えていかなければならないのは、小さくてもまとまり、小さくても表現を持続する忍耐と辛抱ではないだろうか。

厳しく刻々と変化する被災地の文化状況に、私たちは、柔軟にかつ大胆に、かつ成果を焦らず待ち続ける忍耐を持ちたい。心の復興と、新たなコミュニティづくりは、文化芸術が担いたい。

この冊子は岩手県の「令和元年度NPO等による復興支援事業」の補助を受けた、
「文化芸術による新たなコミュニティ形成事業」で作成しました。

提言書　～いわて文化支援ネットワークの活動から～
『震災から9年　次の10年に向けて今やるべきこと』
令和２年３月
発　行　特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
〒020-0874 盛岡市南大通1丁目15-7 南大通ビル3F
TEL 019-656-8145　FAX 019-656-8146
Eメール info@iwate-arts.jp
編　集　　株式会社reto
印　刷　　杜陵高速印刷株式会社

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター